

シンポジウム・大きな骨欠損に対する各種治療法の利害得失

緒言

菊 地 臣 一*

整形外科的治療の歩みのなかで、大きな骨欠損に対してどう対処するかという問題は、先人達がその対応に最も難渋してきた問題の1つです。近年、大きな骨欠損に対して様々な治療法が開発され、昔には考えられなかったほどの再建ができるようになりました。なかでも bone transport やマイクロサージャリーを用いた手技は、今や第一線の医療現場でどんどん行われるようになっており、この分野の治療に革命的な変化をもたらしました。嘗てなら切断を余儀なくされた症例でも、十分に機能的な四肢を再建することが可能になりました。筆者は、研修医時代に、四肢外傷の大きな骨欠損に対して、治療期間や治療の見通しのなさから切断を余儀なくされた症例があったことを昨日のことにように鮮明に覚えています。

骨欠損の問題で日常診療上、われわれが最も遭遇するのは四肢の外傷と骨軟部腫瘍です。また、古来、最も治療に難渋する疾患の一つとして先天性下腿骨偽関節症があります。これらの難問に対して、今やわれわれは様々な有効な武器を持って対処できるようになりました。現在、本邦の第一線の現場で広く用いられている大きな骨欠損に対する代表的な先端の医療技術は bone transport とマイクロサージャリーを用いた再建術であると思います。この2つの手技は全く異なった手法による再建です。しかし、目指すところは同じで、両手技とも全国の各施設でかなりの症例の蓄積がなされつつあります。

■大きな骨欠損に対する各種治療法の利害得失について論ずるべき時に

われわれは、そろそろ大きな骨欠損に対する各種治療法の利害得失を論ずるべき時が来たのではないのでしょうか。医療を担当する側からみると、各術式の最終成績、術後の骨癒合までの期間、日常生活に復帰できるまでの期間、そして偽関節、感染、あるいは二次骨折などの合併症の頻度について、最も広く行われている2つの最先端の術式で相互に比較することが今、求められています。骨欠損の大きさによって両手技は使い分けるべきなのか、力学的な強度はどうか、さらには同じ力学的な強度を持つまでの期間に違いはあるのか、あるいはその強度に永続性は期待できるのか、といったことがわれわれが最も知りたいところです。

* 福島医科大学整形外科

一方、これらの最先端の手技を治療の受け手である患者さんの側からみてみると、治療期間はどうか、患者さんの苦痛はどうか、患者さんにより優しい治療はどちらか、患者さんの治療に対する満足度はどちらが高いか、ということも当然問題にされるべきでしょう。

■対費用効果からみた治療法の評価が必要に

治療する側、そして治療を受ける側の評価は勿論のこと、もう一つ、われわれが忘れてはならないことがあります。それは、医療費を支払う側からの視点です。現在、医療費の高騰が国の経済に重くのし掛かっています。高齢化社会の到来とともに医療費の支払いは、以前のように治療する側の言うがままに支払いをするという時代ではなくなりつつあります。治療法の評価には、対費用効果という面からの検討もこれからは必要です。同じ治療成績が得られるなら、治療費は安い方が良いでしょう。われわれは、これから導入される各種の最先端医療の評価をする際に、そういう観点からの目を持つことを要求されています。

■大きな骨欠損への対応に悩んでいる第一線の現場の先生方に役立つよう

今回の企画にあたっては、bone transport やマイクロサージャリーを用いて実際に精力的に行っている人達に、企画者の意図を汲んでもらって、その利害得失を論じてもらうようにしました。その結果、各執筆者とも著者が述べたような視点をその記述の中に盛り込んでいます。具体的な技術も然ることながら、そのような点にも目を向けて読んで、今後の医療に役立てて戴ければと思います。

今後、種々の疾患や外傷により生じた大きな骨欠損に対する各種治療法の利害得失を、医学的、患者さんの QOL、さらには医療費支払い側の対費用効果といった面に焦点を当てて近い将来、同様な企画を再度計画してみたいと思っております。この企画が、大きな骨欠損にどう対応して良いか悩んでいる第一線の現場の方々役に立てば、この誌上シンポジウムの目的は達せられます。